

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 動物応用科学科

職階 准教授

氏名 宗綱 栄二

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3 年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 年

動物病態学：免疫疾患、循環障害、腫瘍、妊娠期栄養不良といった多角的な観点から病態を深く理解することに努めた。この講義により学生は各疾患の背後にある基本的な生物学的プロセスや相互作用を把握し、その結果として現れる病態の全体像を捉えることができたと考ええる。講義では細かな知識の羅列にとどまらず、病態を形成する根本的なメカニズムの大枠に焦点を当て、学生が包括的な理解を深めることを重視した。また最新の研究成果も講義に取り入れた。アンケートの質問を答えることで双方向の授業の実践に努めた。

専門ゼミ：研究の基礎を固めるために、関連文献の収集とレビュー、および研究計画の策定等を行った。学生が研究テーマについて深く理解し、問題意識を持って今後の研究に取り組めるように解説・講義を行った。

基礎ゼミ：学生にキーワードを提示させ、それを基に各自でテーマを設定した。またプレゼンテーション資料の作成方法、構成、話す速度を含む口頭発表の基本技術について指導した。

毒性学一危機分析実習：特定の化合物や物質が動物個体へ及ぼす悪影響を理解することを目指した。毒性学実験では、標本の観察や麻酔の作用時間を評価するための動物実験を行った。学生が本実習を通じて化学物質のリスク評価への理解を深めるように努めた。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1	120
基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1	30
動物病態学	動物応用科学科	必修	2	120
毒性学-機器分析実習	動物応用科学科	選択	3	50
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	4
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	2
環境毒性学得論	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択		2
動物生命科学特別演習 IV-I	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択		2
動物生命科学特別演習 IV-II	動物応用科学専攻（博士前期課程）	選択		2

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

単に知識を蓄積するのではなく、その知識を実社会のニーズに応える知恵へと昇華させる能力を身につけることに重点を置いている。そのために、基礎力を徹底し、理論だけでなく実践的なスキルも同時に養う教育を提供する。学生一人ひとりが持つ潜在能力を最大限に引き出し、それを社会が直面する課題の解決に役立てられるよう導くことを目標としている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) アクティブ・ラーニングについての取組

無

アクティブラーニングへの取り組みとして、授業内で学生に問題を作成させる試みを行う予定である。このアプローチは、学生自身が能動的に学習過程に参加し、自ら考える力を養うことを目的としている。授業では、単に知識を伝えるのではなく、学生に自分で問題を考えさせ、その解決策を模索させることで、批判的思考能力と問題解決能力を高めるよう努めている。

(2) ICTの教育活用

無

講義スライドにQRコードを組み込み、学生がそのコードをスキャンしてアクセスするオンライン設問に答えることで、リアルタイムで学生の理解度を把握することを予定している。この方法を用いることで、教員は授業の進行中に学生の理解が不十分な部分を即座に特定し必要に応じて説明を追加することが可能になる。学生は自身の理解度を即座に確認できるため、自己学習を促進し、積極的に授業に参加する動機付けにもつながる。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

(1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

B

スライドの内容を視覚的に理解しやすく改善し、学生のフィードバックを講義内容に反映させた。この方法により、学生がより積極的に学習に参加し、理解を深めることができる環境を提供している。

（２）学生の理解度の把握

B

アンケートやレポートを通じて学生の理解度を評価した。定期試験の結果から把握した理解不足の部分を次年度の授業改善に活用する予定である。

（３）学生の自学自習を促す工夫

B

学生の自発的な学習を促すため、関心を引く話題を提供したり、レポート課題を出している。学生が自学自習により深い理解を得ることを奨励している。

（４）学生とのコミュニケーション

B

授業後のアンケートを定期的実施し、学生からの質問に対応している。教員と学生間のコミュニケーションを促進することで学習支援を強化するよう努めている。

（５）双方向授業への工夫

C

学生が主体的に参加する討論を授業内で行うことで、双方向の学習環境を実現する予定である。この方法により、学生の批判的思考能力とコミュニケーションスキルの向上を目指したい。

５．学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

授業の進度について、「分野によってはスピードが速く、追いつけない」という意見があったため、難易度に応じてスピードを調整し、理解が深まるよう努めた。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

今年度の定期試験の平均点は前年度を上回り、学生の理解が深まっていることがうかがえる。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

来年度は、学生の理解をさらに深め、問題発見・解決能力を養うために、アクティブラーニングを取り入れたい。

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

演習・課題の強化：講義内容の定着を図るため、小テストや課題を充実させる。

個別指導の充実：授業外での質問対応を強化し、理解が不足している学生に対して補習や個別指導を実施する。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

今年度の定期試験の平均点は前年度を上回り、学生の理解が深まっていることがうかがえる。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

FD研修会に参加した。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

教育活動に関する今後の目標は、生徒が興味を持ち、参加意欲を高めるような授業を行うことである。また、基礎事項の理解を徹底させ、学生が知識を深くかつ確実に身につけられるようにすることも目指す。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

該当なし。